

ベールキンな日々 木村先生に教わったこと

望月 哲男

木村彰一先生にはいろいろな時にいろいろな形でご指導を受けたが、直に教室で教えていただいたのは大学の3年次と4年次(1972年度と73年度)のゼミだったと記憶する。題材はプーシキンの『ベールキン物語』と『エヴゲーニー・オネーギン』。

40年以上も前のことだから、具体的にゼミの内容を覚えているわけではないのだが、どんな風に教えていただいたのか、思い起こす手がかりはある。幸いにも、当時使った「児童文学」出版の教材が手元に残っているのだ。¹『ベールキン物語』は「Выстрел」「Метель」「Станционный смотритель」を教えていただいたので、その3作のページだけ、多くの単語に手書きのウダレーニエ記号が付されているほか、あちこちに語や表現の意味・用法についての書き込みがある。結果としてかなり汚い風景になっているが、昔の自分を振り返ることのおぞましさを克服すれば、先生の授業のポイントが何となく復元できそうだ。『オネーギン』のほうにも同様の作業がなされているが、こちらは書き込みが比較的シンプルで間違っており、しかも第2章第6連で作業自体が途切れている。何でも教材に書き込むざぼらな学生が、にわかにか改心してノートに写しはじめたとも思いにくいので、その辺で力が尽きたか、卒論にかまけたか、あるいは何か新しい遊びを覚えたのだろうか。

そんなわけで、かなり恥ずかしい『ベールキン物語』メモを素材に、木村先生が授業で教えてくださったことの復元を試みてみる。

まずいっぱい付いているウダレーニエ記号だが、これは先生が授業の最初に、予習として付けてくるように指示されたのだと記憶する。最後の目次ページには、「Метель」「Станционный смотритель」の項に、「アクセント記号も振ること」と汚い学生の字で明記されている。当然のことながら、初学者としては懸命に辞書を引いて調べたのだろう。おおむね正しいようだが、крыльцо, вышлай, остается, единою など、単純なところで間違っている場合もあるし、Бурмин など固有名の読みも苦勞している。先生としてはさぞかし指導に苦勞されたことだろう。дорогой (дорога 造格), об пол, бороду, запер など、ウダレーニエの位置が難しそうなところに赤鉛筆の線があるのは、特に指摘されたのだと思う。発音についても, происшествие, несчастие, жалею などの下線部に、注意マークがついて

¹ Александр Пушкин. Повести Белкина. М., 1971; А.С. Пушкин. Стихотворения. Евгений Онегин. М., 1970.

いる（最後の部分は **ы** と読むように指示されている）。大変丁寧に、手とり足とり教えてくださっていたのだ。

なんといっても力を込めて教えていただいたのは、語や表現の用法と意味についてだったと思う。「Выстрел」でいえば、まずエピソードに登場する Стрелялись мы という表現について、стреляться には「自分を撃つ（自殺する）」という意味と「互いに撃ち合う」という意味があって、ここは後者、と書かれている。本文冒頭の Мы стояли в местечке *** について、стоять は stay と stand の両義があると、英語を動員して説明されている。主人公が登場した後の、Мы за то почитали его стариком でも、за то は instead と поэтому の両義を示しうるとある。いずれの場合も、まず広い選択肢を抑えたいうで、当該のコンテキストでの意味を捉えるよう示唆されている。

副動詞や形動詞（не будучи военным...; причины, побудившей его выйти...; в туза, приклеенного к воротам...）についてももちろん多くを教わった。特に因果関係を含意する副動詞のたぐいについて、初学者にも分かるように丁寧に説明を受けた覚えがある。無人称文のたぐい（С тех пор не прошло ни одного дня, чтоб я не думал о мщении; кинем жребий, кому стрелять первому...）についてもたくさんお教えいただいたが、ここでそれを確認する必要はないだろう。

むしろ単純そうに見える単語の複雑で柔軟な機能を教えていただいているのが印象深い。例えばこの作品では один がキーワードの一つと思われるが、Один я не мог уже к нему приблизиться; со мной одним (он) оставлял обыкновенное свое резкое злоречие...; оставались одни голые простреленные стены といった箇所の「限定」を現すこの語の用法は、繰り返し確認されている。как の多機能性（Я спокойно (или беспокойно) наслаждался моею славою, как определился к нам молодой человек; вот уже четыре года, как я не брал в руки пистолета; не должно пренебрегать этим упражнением, не то отвыкнешь как раз）も同じく授業の中心テーマとして扱われている（最後の как раз は сразу と同義だと書かれている）。С этим словом он хотел в меня прицелиться の хотел や、с меня довольно の с など、同じくチェックマーク付きである（後者の説明には будет с меня 「もう結構」という関連表現が例示されている）。

こうした細やかな語や表現の解説は、最終的に文章の訳自体の正確さ、緻密さに収斂していく。たとえば Имя от природы романическое воображение... というくだりの романическое の訳は「小説みたいな」か、いっそ「ロマンチックな」か、迷うところだが、先生は「ロマネスクな」という訳例を示されている。Рассеянные жители столицы не имеют понятия... のところには、「とりとめのない日々を送っている都会人は」といった、実に適切な訳例が書いてある。Он стоял под пистолетом... は、「銃口に体を向けて立っていた」と、あくまでも細やかである。Люди не смели его остановить の Люди も「召使いたち」

と訳すべきだと書かれている。これは作品が違うが、*«Метель»*の一節 *Музыка* играла *завоеванные песни* の *Музыка* は「軍楽隊」と訳さなくてはならないと指摘されている。*«Станционный смотритель»*の老駅長がペテルブルグで祈願する場面の *у Всех Скорбящих* は、「万人悲願堂（で）」と訳されている（神西清訳では「万悲寺（へ）」）。

テキストの内部と外部に広く目を配り、各語が置かれたコンテキストを歴史的・社会的な要因も含めてとらえながら、解釈の奥行と精度を自然と深めていくような、高度なイントロダクションではないか。

木村先生は文章の音的側面にも注意を促し、学生に音読させるばかりか、適当な一節を選んで暗唱を促した。文字を音として頭に入れろと教えたのだ。学生からすればなかなかの難題だったが、プーシキンにあっては散文も詩的要素を含むだけに、なおさら適切な課題だったと思う。おかげで、主人公の将校がシルヴィオに初めて疑念を覚える場面の、*Мы не сомневались в последствиях и полагали нового товарища уже убитым...*とはじまる文章を、今でも半ページ分ほど暗記している。とくに *За обиду готов отвечать, как будет угодно господину банкету* という、新米将校の去り際の言葉は、「侮辱した償いはさせていたごう。どうなりと胴元さんのお好きなように」といった感じで訳された木村先生の声とともに、鮮烈に記憶に残っている。きつとカッコいい捨て台詞として、いつか泥酔して飲み屋から追い出されたときなどに使ってやろうと思っていたのだろう。

思えば授業の最後のレポート課題も、まさに翻訳だった。ただし題材は、すでに邦訳のある本文自体ではなく、A. L. スロニムスキーによる解説文（*Пояснительные статьи*）のイントロ部分である。ちなみに目次の頁には「76-79（頁）ほんやく。楷書。原稿用紙」と書き込みがある。ワープロという言葉すらなかった時代、先生が学生の汚い字に困惑されていたことがよく分かる。自分がどんな風に訳したのか、まったく記憶がないが、一緒に受講されていた先輩の長谷見一雄さんが、悠揚迫らぬ「ですます調」で流麗に訳されたのに感動したことを覚えている。さまざまな意味で、刺激に満ちた授業だった。

木村先生にはもちろん授業以外の場所でもたくさん教わった。トルストイやレスコーフの翻訳²にも学ばせていただいたし、ご著書『魅せられた旅人』³の「トゥルゲーネフと二葉亭四迷：一つの翻訳論」なども、何度も読み返して啓発を受けている。二葉亭論の骨子は、トゥルゲーネフの作品の「詩想」と「音調」（「文調」）をともに訳に反映しようとした二葉亭の営みを、翻訳技術論の角度から性格づけることにある。先生ご自身は語系を異にする国語間で原作と「音調」を同じくする翻訳を実現するのは理想にすぎないという意見である。それゆえに原作と調子が違っていても、独自のスタイルで貫かれた翻訳な

² トルストイ（木村彰一訳）『アンナ・カレーニナ（筑摩世界文学大系 41）』筑摩書房、1971年；レスコーフ（木村彰一訳）『魅せられた旅人』岩波文庫、1960年。

³ 木村彰一『魅せられた旅人——ロシア文学の愉しみ』恒文社、1987年。

らば、自国の文学に貢献すると評価する。しかしなおかつ、詩想と音調の伝達をともに翻訳の目的として掲げた二葉亭の覚悟のあり方と、それに注がれた努力および成果に対して、満腔の敬意を表明している。こうした姿勢は同書のトルストイズムを論じた文章でも基本的に同じである。先生にとって人間の思想や構想自体の孕む矛盾や二律背反は、おそらく致命的なことではない。なぜなら非現実的と見える理想を掲げ、邁進することのできる強く大きな精神こそが、人々に感動を与え（しばしば迷惑でもあるが）、日常の風景に埋もれた本質的なことがらに目を開かせてくれるからだ。木村先生の文芸論そのものが、様々なタイプの文人たちの抱えた困難や払った努力にポジティブな方向から光を当て、読者を新しい「気づき」に導いてくれる、感動的な文章である。

もちろん、こんな風に近代ロシア文学に関する授業、翻訳、評論の分野だけで木村先生を語るのは、きわめて不十分なことに違いない。筆者の知識の及ばないスラヴ言語学、文献学、中世文学の広い領域でたくさんのお仕事をされ、ロシア語関連だけでも、文法書、辞書、教科書など、それぞれに規範・標準となるものを作られた先生だからだ。筆者ももちろん教科書や辞書の段階からお世話になっているのだが、それはもうお釈迦様の手の中のサルのようなもので、お世話になっていることさえ忘れていた。

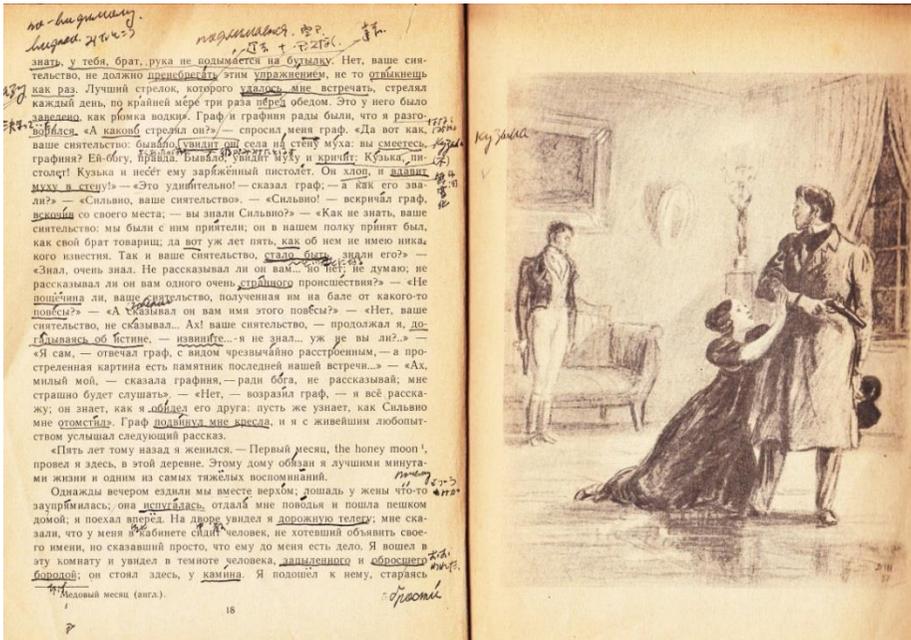
そういえば、ついつい忘れがちなのは、自分が今あること自体に対する御恩である。思えば 1972 年度に学部移行した我々の世代は、ちょうどその年に木村先生のもとで東大文学部露文学科が発足したおかげで、この道に進めたわけである。もちろん先輩諸氏のように、比較文学科などの枠で露文学をやるのは可能だったかもしれないが、不器用な学生が現実にそういう道を歩めたかどうか、はなはだ自信がない。ロシア語・ロシア文学の学科を作ってくださった先生と、それを受け継いで発展させ、我々の指導を引き継いでくださった川端先生を始め先生のお弟子さんたちのおかげで、自分は大好きなロシア文学を専門として学ぶことができた。川端先生には就職の世話までしていただいたので、よろこんでそれまで存在も知らなかった北大のスラブ研究センターというところに行ってみたら、なんとそれもかつて木村先生が創立メンバーとして関与した施設だったという次第。これはもはやお釈迦様とサルどころか、海とサカナの関係のようなものである。

思えば、木村先生が北大法学部のロシア語ロシア文学講座に初代専任として着任したのが 1947 年、同じ法学部にスラブ研究施設を立ち上げて初代主任となったのが 1955 年、東京大学文学部にロシア文学科を創設したのが 1972 年ということで、30 代前半から 50 代後半の 25 年ほどの間に、驚くほどたくさんの大きな仕事をされている。先述の『ベールキン物語』の授業などは（初学者にはかけがえのない貴重な経験だったが）、先生の人生の一コマにも満たないエピソードだったのだろう。

さて、怠惰な学生もそれなりに齢を重ねて 60 代も半ばになった今、改めて自分はいったい何を作り、何を書き、どんな教育をしてきたか——そう考えると、暗澹たる気持ちに

なるばかりである。せめて何かの形で先生の学恩に報いたい気持ちはあるのだが、非力なため「どうなりと胴元さんのお好きなように」と言えないところが情けない。

(もちづきてつお 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)



木村先生に教わった『ベールキン物語』の頁